

後 記

追悼とは、「先に逝った者を悼み悲しむのみならず、先に逝った者と共に過ごした時間をいま一度想い起こすことをつうじて、現在の自分自身を見つめ直す営みである」と、かつてある研究者が述べたことがある。この考え方に従えば、追悼論文集とは、遺された者が、学問をつうじてさまざまな教えや影響をうけた故人と共にした時間を想い起こしつつ、研究者としての、また一個人としての現在の自分自身のあり方を、共に見つめ直す営みということになるだろうか。

平成二四年五月七日、慶應義塾大学名誉教授、生田正輝先生がご逝去された。本論文集は、生田先生のご逝去を悼み、生田先生のご生前にさまざまなかたちで学恩をうけた方々にご執筆いただいた論稿の集成である。執筆いただいた方々は世代的にも多様であり、また、生田先生からうけた学恩のかたちもそれぞれさまざまである。そこには、生田先生をひとつの大きな源とする、マス・コミュニケーション研究・ジャーナリズム研究を主軸とした、慶應義塾

の学問的研究のひとつの歴史的系譜とその裾野のひろがり、そのまま形を成して現れていると言うこともできるだろう。

また今回、原稿の取りまとめを担当させていただき、とりわけ印象に残ったことがある。それは、執筆者の方々がとても真摯な姿勢で執筆に取り組んでくださったということであった。論文集の性質上、原稿ご依頼時に設定した執筆期間は通常よりもかなり短いものとならざるをえなかった。それにもかかわらず、ほとんどの執筆者の方々が、ほぼ締め切りどおりに、お原稿を提出してくださった。担当者として身が引き締まる思いを持つと同時に、執筆者の皆さまの生田先生への思いをもまた、強く感じた次第である。執筆者の皆さまのご協力にあらためて感謝すると同時に、生田先生のご冥福を、共に、心よりお祈り申し上げたい。

平成二五年七月

法学部教授 澤井 敦